

ISSN 2189-9290

The University of Aizu
Center for Cultural Research and Studies
Annual Review No.26, 2019

会津大学文化研究センター
研 究 年 報

第 2 6 号

2 0 1 9



会津大学

2020年3月発行

目次

	Page
巻頭言	
・“変化”の第一歩－2019年度活動報告－	荻間澤 勇人 1
定年退職を迎えて	
・退官に寄せて	長谷川 弘一 2
研究論文	
・AI(人工知能)を巡る問題・課題と今後の方向性について	清野 正哉 3
・視線計測法を用いた保育者の観察力量を高める方法の開発① －注視の回数，時間及び働きかけの内容－	中澤 謙，久田泰広， 渡部琢也，西原康行 21
・教養科目アカデミックスキルにおける学生の自己評価と授業実践2 －クラス間の比較を中心に－	蛭名 正司 29
・伝統中国における禁武政策と民間武術の法的基盤 ——武器に関する禁令に着目して	池本 淳一 37
研究・教育・活動報告	
・網谷 祐一	55
・池本 淳一	56
・蛭名 正司	57
・荻間澤 勇人	58
・小暮 克夫	59
・清野 正哉	60
・中澤 謙	61
・長谷川 弘一	62

【巻頭言】“変化”の第一歩

－2019年度活動報告－

文化研究センター長 荻間澤勇人

2019年度は文化研究センターが変わったと感じた一年でした。変化の一つは、4月に、哲学・科学史をご専門とされる網谷祐一先生、社会学をご専門とされる池本淳一先生、経済学をご専門とされる小暮克夫先生が着任されたことです。先生方は、本センターが担う役割において、それぞれの立場から意見を述べられ、“新たな風”を吹き込んでくださいました。今後も、本センターの変化を加速してくださるものと期待しております。

変化の二つめは、「アカデミック・スキル1」と「アカデミック・スキル2」です。これらは、教養教育を担う文化センターの職員全員が担当し、センターの独自性を示す科目です。今年度、2年目を終えて、課題が見つかりました。それは、教養科目の素養が薄い状態で「アカデミック・スキル2」の論文作成に進むことです。その課題に対応して、2020年度からは、開講時期について、「アカデミック・スキル1」は第1期のままですが、「アカデミック・スキル2」は第4期に変更します。教養科目を第2期と第3期に開講して、その学びを素地として論文作成に取り組むというねらいです。「アカデミック・スキル」については、今後も工夫を重ねて、基本推奨科目にふさわしい内容に磨きあげたいと考えます。

変化の三つめです。2019年度は、「哲学（英語）」「社会学（英語）」「経済学（英語）」「地域開発論」「地域社会学」を開講しました。本センターの教官の専門領域の科目を開講したことで、学生のより深い学びが可能となり、選択の幅も広がったと考えます。また、英語による授業は、前述の3科目に「芸術学」「会津の歴史」を加えた5科目となり、留学生にとってより望ましい学習環境が整ったと考えます。今後、さらに教養科目の精選を行い、学生の学びの環境作りを進めていきたいと考えます。

変化の四つめです。2020年3月末をもって、主に体育教育を担当された長谷川弘一先生が定年退職されます。長谷川先生は短期大学部に6年、その後、開学時から本年度まで合わせて33年間の長きに渡って本学に勤務され、本学及び本センターの発展に大きな御功績を残されました。また、昨年は、長年の修行の成果ともいえる範士8段を取得されました。範士8段は剣道の段位としては最高峰です。長年のご勤務、誠にお疲れさまでございました。これまでのお疲れが蓄積していると伺っております。十分な休養をとられ、つぎのステージでますますご活躍されますことを祈念いたします。

また、長谷川先生の後任の教官選考が行われ、沖和砂先生が2020年4月から着任されます。文化研究センターに爽やかな新風を吹かせてくれると期待しています。

最後に、新年度は宮崎敏明先生が学長になられます。これまで学部長として、四期制の導入など大学改革の前面に立ってこられました。今後も改革を進められるものと思います。そして、文化センターに期待されるものも変化すると予想されます。センター所属教官8名の力を合わせて、自らの“変化”を進めていきたいと思っております。

退官に寄せて

長谷川弘一

大学を卒業後、10年程福島県内の県立高校教諭を務め、その後会津短大教員となったことを契機に、本学開学時から教鞭を執りながら研究者としての職務に就くことになり、いつの間にか教員生活 43 年もの時間が過ぎ去っていきました。根っからの実技畑で育った自分ができること、それは何か、ずっと悩み抜いてきたような気がします。そしてその悩みは今も消えることはないのですが、悩みの方向性は確実に変わってきたことを自覚できます。それはどのように世の中の流れや自分の環境が変わろうとも、この人間社会に消えることのない日本文化の重みというものを静かに、そして謙虚に伝え続けたいという願いに変わってきているようです。

恥ずかしながら、私はこれまで 55 年もの間、剣道というある意味独特で奇異な世界の中だけで自分と向き合ってきました。自己の弱さの克服という問題だけは、おそらく人生が終わるまで満足した答を得ることはないでしょう。剣の段階が進むほどに新たな課題に水澁のなかで視界を失い、身動きのできない帆船のように手探りの毎日が続いています。剣道も人生もまさに「山々雲」です。一つの山の頂上に立って周りを見るといつももっと高い山の存在に気づきます。さらに高い山に上り詰めてもまたそれよりも高くそびえる次の山が目の前にやってきます。きっとエベレスト山頂に上り詰めても、その上には雲が上空に待ち構えていることでしょう。まさに雲をつかみに行くような果てしなく続く道に迷い込んでしまった感想を持たされます。

さて、退職後のことですが、上ばかりではなく山の麓の木々や草花の香りに愉しみを知り、長閑な生活を営む一老人になりたい、そんな望みがふと過る今日この頃です。愚かにもやっと「剣も人生も愉しむことを忘れては全てが意味のないものになってしまう」ことにやっと気づいたようです。ようやく自分の弱さも含めて自分自身を受け入れ、解放できそうです。

これからが本当の意味での修行が始まるものと覚悟を決めています。

末尾となりましたが、これまで多くのご迷惑をおかけしてきましたことに深謝しますとともに、皆様のご多幸とご発展を心よりお祈りいたしまして、御礼の挨拶としたいと思います。お世話になりました。そして本当にありがとうございました。

不一